

される。短歌人、俳句人が一堂に集まって行なう年行事の全国大会も誘導される。碑林の傍に資料館も欲しい。

現在、文人のものはかなり保存が行き届いているが、歌人、俳人のものはかなりの人でも保存されていない。これは後世に対して有意義である。

もう一つ、車が庶民の間に浸透したまま、観光旅行も今までは大分形が違ったものになっていくはずである。阿蘇と天草あたりに貸別荘若しくは貸ホテルを作り十日、一月単位でホテルよりぐっと安く貸す。そして、そこを基地にして九州各地の旅行を車で楽しんでいただく。九州に来る観光客もここを基地にすることで、よりくつろげる。その点では九州の中心に位置

## 火山灰土を利用した阿蘇紬などを

水俣市古賀町 小形 賢治 (公務員 35歳)

我々に一番身近かな衣食住のことで考えてみました。

### 第一の衣について

昭和元録を呼ばれる昨今、日本人本来の着物である和服の需要も著しく増し全国処々々々で織物が織られ全国的に有名になっている織物も多く見聞きする。本県には現在のところ、残念ながら見当たらない。

この数年県下の開拓地の振興として全県下にわたり養蚕に取組んでいますが生糸の生産に伴い本県でも織物の特産品を生み出せないものでしょうか。

世界的にも知られている阿蘇もただたんに観光のみでなく、阿蘇方面の火山特有な茶褐色の泥土を利用して土染料とし、くづ繭を使った生糸を染めてザツクリした素朴な紬風の織物を織っては如何でしょうか。名称も阿蘇紬と。

また、八代方面で生産されている畳表となっているイ草の繊維を化学的処理により、強靱にして阿蘇の土

する熊本は、最も有利ではないだろうか。もう一つは、県人のための別荘地が欲しい。

所得が向上するにつれて人々は日帰り旅行より長く海、山に滞在したいと思う。が、宿泊費の負担は大きい。一月単位ぐらいの貸別荘であれば、二、三軒共同で借りられる。いまはすでに県外観光客向きでない観光地、たとえば日奈久などいかがであろう。又、観光地への入口(例えば天草五橋、横断道路)は変にうらぶれている。観光客にみるべき土地を、県が所有してこんな試みをしていただくのも一案である。

山の多い熊本県のおちこちに、しゃれたコテージ風の小屋が散在するのは考えただけでも楽しい。

染にした生糸を綾にして肥後緋か肥後縞を織るようにする。

### 第二の食について

小、中学校の児童の給食も広範囲に普及して、児童の心身健全の育成に寄与していること大であります。ただいづれの学校でも諸物価の高騰に如何に対処され給食費の節減に苦慮されておられることかと思われ

ます。

給食費に占める割合は、僅かながら不可欠であるそ菜を、そ菜園センターで生産し、これらを公営企業の形で維持して行けないものでしょうか。

学校給食用に供するそ菜園センターを県下の随所に設け、その土地に適合したそ菜を耕作して各センターが交換しあって給食用の一切賄うことになれば父兄の負担も軽減されましょう。少数な個人の利益より社会的な利益が優先いたしましょう。最後に住に関連して

県下の実業工業高校に造園科(或いは造園工学科)を設立する。

県下には、至る処土地特有の石が多く埋没放置の状態にありますが、人口過疎となりつつある僻地に庭園の見本市を造り全国より顧客を招き、気に入ったものはそっくりそのまま買上げ貰う膨大な庭園都市が誕生することになる。

また、都会では、庭園にする敷地がない人のために室内用に従来の盆栽を拡大したミニ庭園を造る。

県北の長洲方面の鯉、五木や球磨川方面の石、そして県下に拡っている肥後椿と、多角的に需用度も高くなりましょう。

そのためには、肝心の庭師の育成が先決となり、今までの庭師の感覚に幾何学的、工学的なセンスを加えた造園料を設けることになりそうです。

各地の石もそれに適した研磨により置石として觀賞するばかりでなく特定な建材や敷石として新たな特産品に生まれ変わらしましょう。

更に欧米先進国に習ってホテルも国際化した今日、本格的なホテルも各処に建立していますが、人材育成にホテル科も設け有能な旅館経営者やホテルマンを育てる。

いづれのこと専門的な見地からでなく、思いづくまま記録して見ましたが、何等かのヒントにでもなれば幸甚であります。

最後に、停滞気味の天草と県南の水俣市をスポーツを通して観光面をP・Rして頂きたい。

すでに世界的に知られている英仏のドーバー海峡横断遠泳に倣って、天草と湯之尻(水俣市)を結ぶ不知火海峡横断遠泳を外国選手や日本全国から知名選手を招待して国際的に行なうは如何でしょうか。ひいては本県への移動人口も増加し本県全体のP・Rともなりましょう。

## 熊本の百年におもむ

熊本県明治百年記念式典における「県民決意のことば」から

### 小学生の部

## 布田保之助おうに学ぶ

坂本文子(上益城郡矢部町立浜町小六年)

「ドドッ、ドドッ、ドドッ、ドドッ。」

―式典の日のスナップ―

滝のように流れ落ちる水。高さ二十メートルの通潤橋の真中から勢よく吹き

出す水は、すさまじく、驚きと感謝の目で見守られています。

九月一日は、年に一度の八朔祭です。矢部郷の豊作を祝っての祭で、町の人も農家の人も、この祭にわきたち、出る人、見る人で、道は、人、人の列です。

目を通潤橋に移すと、真白い水しぶきをあげている放水に、矢部町のほこり、布田保之助おうのことが、しのばれてまいりました。瀬川をすぐそばにひかえ

ながら、土地が高いばかりに干害に悩ま

されている白糸台地、布田保之助おうは雨どいを伝う雨水の流れにヒントを得て

用水のためのこの橋を作りました。当時の事ですから、石を積み重ねて作るこの橋は、容易なことではなかったでしょう。

おうぎ形のがんじょうなめがね橋には、石の管がはいっており、石はくさび形にしっかりとつながら、そろばんではじいた寸法に一分のくるいもないそうです。人の力だけで一四年前に作られた「石造アーチ架橋サイフォン式」の、この橋は、どんな台風にも、びくともしませんでした。そして、矢部町をあたたく見守ってきました。白糸台地は、布田保之助おうによって、この橋によってすくわれ、多くの米の収穫をあげていま

す。

そして、この矢部町は、明治百年の今日に至る間、こくのある肥後米がとれ、おいしいお茶がとれ、熊本の都心から車で一時間というきょうりで、市内も町も変わらなくなりました。

思えば、鎖国によって世界の進歩からとり残された日本も、明治政府と多くの先人の方々の努力で新しいものが取り入れられ、世界の中の日本として、めざましい飛躍をあげてまいりました。すきやくわの農業が、耕うん機や脱穀機、もみすり機と機械化されてきました。病虫害防除に、ヘリコプターも使われるようになりました。ハンドトラクターやティラーをあやつるお百しようさん。段々畑が広い田畑に変わり、農業熊本県の矢部町